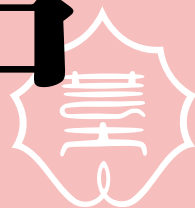


藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



21

SEPTEMBER 2010
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

萩岡松韻

【第二回】受賞教員インタビュー



【第十三回】教員は語る
藤崎圭一郎 × 福中冬子
「TOPICS」音旬映旬美旬

【第四回】受賞学生インタビュー

澁澤星 仁田原祐 田中美妃

【第二回】

上野の寄り道 散歩道 味の老舗

【第十回】上野の杜の波瀾万丈 東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 前篇

萩岡松韻

受賞教員インタビュー 第2回

古典の伝承、若手の育成、新しい創作活動で
伝統文化ポララ賞優秀賞を受賞した箏曲の第一人者。



Photo by Maki Shibata

箏曲という音楽

「箏曲」とは、「こと」を使った音楽のことです。私の曾祖父の時代までは日本の「こと」にも「琴」の字を当てていたのですが、学者の方々の意見を取り入れて「琴」は中国の「こと」を表し、日本のものは「箏」と表現することになりました。

東京藝大の「箏曲」は、音楽学部

の前身である東京音楽学校以来の古い歴史を持っています。旧奏楽堂で催された最初の演奏会でも、ピアノを滝廉太郎、ヴァイオリンを幸田延、邦楽では私どもの流派である「山田流」が作曲しました。

山田流箏曲は、江戸時代の中期に「生田流」から分かれたものです。上方で生まれた生田流は三味線が主役で、箏は伴奏的な役割でした。

それを山田流の流祖山田斗養一とよいちけん校が江戸に移り、箏が主役となる音楽をつくったのです。また山田流は歌を大事に扱います。「河東節」という歌舞伎の「助六」に使われる音楽がありますが、その発声法を邦楽に取り入れて、山田流は江戸前な歌い方を取り入れたのです。山田検校が宝生流の能楽師（謡）であつたことから、「熊野」や「葵上」といった能を題材にした作品が豊富なのも大きな特徴ですね。

新しい古典の創作

邦楽を学ぶうえで大事なものは、いちばんに稽古です。正しい練習方法で少しでも多く稽古して、耳を鍛える。今の若い人は楽譜が先に立ってしまうのですが、やはり耳からだと思えます。耳の感度をよくし、いろいろな芸風を聞いて、自分の持っている引き出しを増やしていく。あらゆる楽曲に対応できる、やわらかい感性を持つような学び方が必要だと思います。

「伝統文化ポララ賞」の優秀賞を頂戴したのは、二〇〇九（平成二十

第21号 目次

02 受賞教員インタビュー 第2回

萩岡松韻

geidai gallery

04 中島千波 アニマル親子と胡蝶蘭

06 教員は語る 第13回

藤崎圭一郎×福中冬子

09 受賞学生インタビュー 第4回

澁澤星仁田原祐田中美妃

12 TOPICS

音旬 映旬 美旬

20 展覧会&演奏会情報

明治の彫塑 ラグーザと萩原碌山
モーニングコンサート

22 上野の寄り道 散歩道 第2回

味の老舗

24 上野の杜の波瀾万丈 第10回

東京音楽学校生の陸軍音楽隊入隊前篇

橋本久美子

26 NEWS2010.02 ~ 2010.07

編集後記



二年の十月になります。同時に受賞したのは立派な経歴をお持ちの方々ばかりで、身が引き締まる思いでした。私に対しては、古典を傳承し若い方たちに教育しているということ、新しい作品の創作活動を評価して賞を与えてくださったようです。

新作といっても伝統的な調弦や音階を踏まえて、古典のよさに接していただくというものです。さらに「山田流箏曲」としては、器楽だけの曲ではなく、歌唱のある曲を聴いて、邦楽の素晴らしさを知っていただきたいと思っています。

いま取り組んでいるのは、『源氏物語』の五十四帖です。言葉もわかりやすくして、そのなかに原典の持つ感情を滲ませるように工夫した曲づくりに励んでいるところです。



「第4回 秋岡松韻りさいたる」2009年10月26日、国立劇場小劇場

藝大通信

No.21

TOKYO GEIDAI

東京藝術大学広報誌

藝大通信 第21号

■編集発行

東京藝術大学藝大通信編集部

■編集委員

松下 計（美術学部デザイン科准教授・編集長）

斎藤典彦（美術学部絵画科日本画准教授）

小鍛冶邦隆（音楽学部作曲科准教授）

毛利嘉孝（音楽学部音楽環境創造科准教授）

筒井武文（大学院映像研究科映画専攻教授）

大石 泰（演奏芸術センター准教授）

■アートディレクター

松下 計

■表紙デザイン

松下 計

■表紙撮影

柴田麻希

■撮影

村上友重

■制作

株式会社 平凡社

■発行日

平成22年9月3日

■お問い合わせ先

東京藝術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 050-5525-2026

FAX 050-5525-2479

E-mail tolawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>

萩岡松韻（はぎおか・しょういん）教授—邦楽科（箏曲）一九五七年三世萩岡松韻の長男として生まれる。一九七〇年中能島欣一師・中能島慶子師に入門。一九八一年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。二〇〇二年～〇四年東京藝術大学音楽学部非常勤講師。二〇〇四年～〇八年東京藝術大学音楽学部助教教授（〇七年四月より准教授）。二〇〇八年～東京藝術大学音楽学部教授。二〇〇二年「第二回萩岡松韻りさいたる」で文化庁芸術祭優秀賞、二〇〇五年第五十五回芸術選奨文部科学大臣新人賞。二〇〇九年には第二十九回伝統文化ボーラ賞優秀賞を受賞した。





社会との回路に いかに接続させるか

藤崎 東京藝術大学とのおつきあいが始まったのは一昨年からになります。

僕は法政大学デザイン工学部でも非常勤講師をやっている、大学院のシステムデザイン研究科（現・デザイン工学研究科）で「美学・意匠論」という講座を持っています。僕はもともとデザイン雑誌の編集者ですので、学生が雑誌をつくっていく過程のなかで「デザインとは何か」を考えてもらうことができないかと考えてフリーペーパーをつくることにしたのです。

ですが、法政のシステムデザイン研究科は、理系でしかもプロダクトデザインとエンジニアリングとマネジメントを横断する教育をしているものですから、グラフィック系が弱いんです。そこで、藝大デザイン科の松下計先生にデザインの監修をしていただけないかとコンタクトをとったんですね。それで法政と藝大でコラボレーションして、企画編集は法政の院生、デザインは藝大デザイン科の院生が手掛けるということになり、そこからつながりが生まれました。それが『DAGODA』という雑誌なんです。この雑誌を始めてから、藝大の雰囲気にも少しずつ触れるようになっていったんです。

藝大のデザイン科といえば、キャラクターが立ち、個性あふれる仕事をするデザイナーを数多く輩出してきているところです。一方で、デザインというのは、企業や社会のシステムの一部として、自分の名前が出てこないことに美学を感じるところがあります。そのあたりバランスが大学内でどうなっているのか、裏方的な人材を輩出する教育機関としての器の大きさは実際にどうなのか、これから知ることができるのではないかと期待しています。

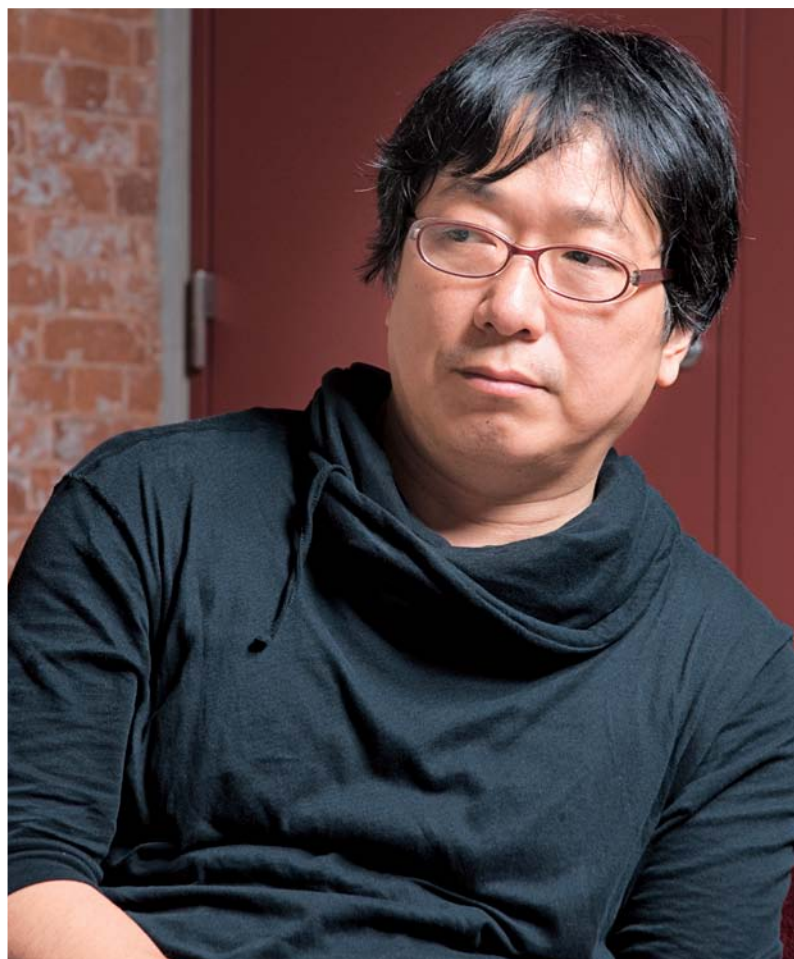
福中 私のほうはこれまで講師として出講したこともなく、今年からが本当に初めてですが、藝大に対して、とくにこうであるというイメージはありませんでした。ただ、日本の音楽研究の中心に位置している、という認識は、もちろん持っていました。

ここに来てまだ数か月ですが、学生はとも真摯に自分の研究対象に向き合っていると思いますし、私自身、学生たちからとてもよい刺激を受けています。しかし、これは藝大生に限ったことではないと思いますが、いまの学生はいろいろな意味で、「外」との繋がりを意識的に考える機会がとて少ないと思いますね。

たとえば、私は論文の執筆のためにしばらくヨーロッパに滞在したことがあるのですが、日本人音楽家がこれだけ世界で活躍している時代とはいえ、日本人研究者が西洋音楽史を学ぶということは、まだまだ「当然な事」ではありません。つまり日本人である我々がなぜ西洋音楽史を対象に研究活動をしているのか、その理由づけとか文脈をきちんと説明できることが求められる。そういった意味での筋肉は研究者にとつて必要だと思うのですが、藝大の学生たちはまだまだ学外というか、社会から揉まれていないなという印象を受けることがあります。

さらに、音楽という芸術は、人間が社会での営みをしてきたうえで生まれてきたものですが、どんな曲にも、その時代のその場所で成立したという理由があるわけです。そういった前提を理解することによって、研究の幅や、それを発信するときにいつてくる結果が変わってくると思っています。

藤崎 藝大には、物をつくるという面ではとても高い技術を持った人たちが入ってきますが、学生にはまだそのスキルを社会と接続させる回路がありません。形をつくれるというの



第13回 教員は語る

美術学部デザイン科 准教授

藤崎圭一郎

福中 冬子

音楽学部楽理科 准教授

藝大への期待・抱負・提言



は、フィニッシュを決められるということですね。マーケットやコスト、技術的な制約や安全や環境への配慮などを考えて、最終的な製品の形を提案する。それは、サッカーに例えれば「フォワード（FW）」の役割です。学生は豪快なシュートを決められる技量を持っているわけですから、教員の役目は、社会というフィールドで点を決められるFWを育てることになります。決定力のあるFWが不足しているのはサッカーだけの問題じゃないですよ。しかし、モダンサッカーで試合に勝つためには、シュートがうまくいだけではダメです。FWもちゃんと走って守備もするチームプレイが必要なんです。ただ前に張って自分のスタイルで蹴っているだけでは得点は入りません。ちゃんとオフサイドのことも学んでほしい（笑）。

デザインは本来、世界の人たちが豊かに暮らせるようになるための技術としてあるべきものなので、僕は社会と繋がる道を敷いていきたいと思っています。でもやはり藝大はFWを育てるところで、DFやMFを育てるところではないですね（笑）。

福中 一般論として、なにごとでも汗をかいで勉強し、人と張り合って獲得したものでない、自分の身にはつかないと思うのです。ところが、現在の日本の消費文化は十代や二十代ばかりに目を向けているものですから、彼らはずっとちやほやされてきて、自分たちが社会の中心だと勘違いしているというところがあるのかもしれない。そしてあえて、その輪のなかから出て、ほんとうに自分がやりたい事、やるべき事をやる、という機会が減ってきているような気がします。やわな意味での自分探しはするけれども、自分の守備範囲にないことをあえてやるという気概がな

い。だから、やりたいことだけなんとなくやるといって、甘えの文化がはびこっているような気がするんですね。

藤崎 私も同感です。環境や時代はどんどん移り変わっていくのに、成功体験を引きずりすぎている気がします。学生のうちはいろいろなことができるのだから、もっと成功体験を捨てて挑戦してほしい。僕はジャーナリストでもあるので、手で考えるだけでなく、足で考えることの大切さを伝えていきたい。直接人に会って話を聞くと人と違った話が聞ける。インターネットでは、みんな同じ情報になっ

領野を超えてアピールする 現代音楽

藤崎 福中先生がレクチャーをされた「藝大21 創造の杜 ヤニス・クセナキスー音の建築家―」（四月二十二日・東京藝術大学奏楽堂）を聴きに行っていたんです。

僕がクセナキスのことが気になっていたのは、ル・コルビュジエとの関係からでした。クセナキスは作曲家として有名になる以前に、コルビュジエの下で「ラ・トゥーレット修道院」（一九六〇年）の設計を担当しました。「ラ・トゥーレット」には「光の波動面（オンジュラトワール）」と呼ばれる「あみだくじ」状の窓割りがあって、あのデザインとクセナキスの音楽がどのようにつながるのか関心を持っていたのです。それが先生のお話とクセナキスのなんて言っているのか、非常に身体的な音楽を聴いて、その深いつながりが裏づけられた気がしました。

コルビュジエとの関連性でいえば、「モデュロール」との結びつきも感じました。人間の身体と黄金比に基づいた建築概念ですが、科



福中冬子他編『オペラ学の地平——総合舞台芸術への学際的アプローチⅡ』（彩流社）



中：藤崎圭一郎著『デザインするな』（DNP アートコミュニケーションズクリエイティブ）

左右：フリーペーパー「DAGODA」

藤崎圭一郎（ふじさき・けいいちろう）
美術学部デザイン科——准教授
一九六三年横浜生まれ。
一九八六年上智大学外国語学部ドイツ語学科卒業。
一九八六年美術出版社入社。
一九〇〇年『デザインの世界』編集長を務める。
一九九三年より独立。
一九九三年金沢美術工芸大学非常勤講師。
二〇〇三年桑沢デザイン研究所非常勤講師。
二〇〇四年法政大学デザイン工学部兼任講師。
二〇〇五年法政大学大学院システムデザイン研究科兼任講師。
二〇一〇年より現職
著書に『デザインするな』（DNPアートコミュニケーションズ）、
共著に『建築と植物』（MAX出版）、
『グラフィック・デザイナーの仕事』（平凡社）。

福中冬子（ふくなか・ふゆこ）
音楽学部楽理科——准教授
一九九二年国立音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒業。
一九九五年私立ニューヨーク大学人文大学院入学。
二〇〇一年〜二〇〇三年同非常勤講師。
二〇〇三年同博士課程修了（Ph.D.）。
二〇〇六年慶應大学非常勤講師。
二〇〇八年明治学院大学非常勤講師。
二〇一〇年より現職。
共著に『オペラ学の地平』（彩流社）がある。

学的で数学的な手法を用いながら、非常に人間的で有機的なものです。そういうところがクセナキスの身体的な行為による演奏や有機的な作風とリンクするのではないのでしょうか。

福中 あの日コンサートは、現代音楽の巨匠を毎回ひとりずつ紹介するシリーズ（「創造の杜」の一環で、今年はクセナキスのオーケストラ作品をプログラムにしたものでした。クセナキスの室内楽は聴く機会はあるものの管弦楽曲は編成が大きいし、演奏が難しいとされています。ですから、藝大はとても冒険的な試みをしたことになります。

クセナキスの曲は、藤崎先生からご指摘いただいたように、まさに身体的な音楽で、ライブでないとはんとうのよさがわからないものなんです。現代音楽のコンサートは比較的集客が厳しいのですが、あの日多くの方に足を運んでいただき、嬉しく思っています。クセナキスの音楽という珍しさもありましたし、建築やデザインに興味がある方も足を運んでくださったのかもしれないですね。

人と人をつなげる「ハブ」としての役割

福中 クセナキスのコンサートがまさにそうですが、研究と演奏をリンクさせた催しを試みていきたいですね。すでに演奏芸術センターの松下先生や大石先生が中心になってやっていらつしやいますけれども、藝大が持っている音楽的コンテンツのすばらしさを、子供たちに伝えるような活動は非常に意義があります。音楽は単純に楽しむだけではなくて、考える対象でもあるのだということに気づいてもらえるような催しを、どんどん外に向けてやっていきたいです。さらに、たとえばオペラ作品に映像も取り入れるといったように、マルチメディア

的な発想のコンサートに取り組むことも、個人的にはこれからの課題だと思っています。
藤崎 僕はデザインジャーナリストなどと名乗ることもありますが、基本は編集者なんです。編集者の大きな仕事は、人と人をつなげることだと自分では思っていますので、せっかく藝大に来たんだから、人と人を繋げる「ハブ」みたいな場をつくっていかたいと思っています。学外からいろいろな人が藝大に集まり、さまざまな議論ができるような場にしていきます。もちろん、日本だけではなくて、世界中の人たちが集えるような場所です。なにかイベントをやりたいというとき「藝大でやるのがいいんじゃない」と自然に会話に出てくるようになってくれれば、すごくいいと思いますね。



Interview with the Brilliant Students

受賞学生インタビュー 第4回

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

サロン・ド・プランタン賞・台東区長賞受賞

澁澤 星

◆大学院美術研究科修士課程絵画専攻(日本画)1年

私が受賞した「サロン・ド・プランタン賞」は、大学から卒業制作作品に対して授与される賞で、その副賞として台東区長賞をいただきました。4年間の大学生活の節目にあたって精一杯取り組んだ作品をこのような形で認めていただき、大変光栄に思っています。

子供のころからずっと、絵は自分が好きで描いていました。写実表現をおぼえたいと本格的に学び始めたのは高校1年生のころからです。決して努力しただけ結果の出る保証のない絵描きの道に進むことは、幼い高校生の自分にとって、すごく勇気のいる決断でした。周囲の反対にもあいましたが、それでも決して後悔したくなかったので踏み切ったの

です。絵の道を諦めることを誰かのせいにしたくないということもありました。

さまざまな表現技法があるなかから日本画を選んだのは、素材が人のなかなか超えることのできない「自然」からできているためです。自然の色や質感はとても深く魅力的で、人の手で一から作り出すことはとても困難です。そして私が創り出したい世界の表現に最も合っているのが日本画の素材だと思ったのです。

卒業制作で描いた「萱草に寄す^{わすれぐさ}」は、実在の風景ではありませんし、あるがままの写実でもありません。実際に存在しなくても自分の中にある、あるいはあつてほしいと願う風景や世界を描き出そうとしたのです。「カフェバー」という自

分にとってなじみが深い空間を舞台に、グレン・グールドの奏でるバッハの音楽が流れ、紅茶の香りが漂うなかで、立原道造の詩集を読んだり、さまざまな幻想が訪れる……。

また子供のころに暮らしたことのある長崎は、私にとって原風景ともいえる場所で、自然豊かな日本の風土と、オランダや中国などの異国の景色のあいまった独自の雰囲気が、私の今の世界観に大きな影響を及ぼしています。

卒業制作は大きな節目ですし、この作品は初めての大作でしたから、人知れず根底にある自分の内世界を表現したかったのです。



澁澤 星「萱草に寄す」2009年

しぶさわ・せい

1983年東京都生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。卒業制作作品「萱草に寄す」(2009年度)でサロン・ド・プランタン賞・台東区長賞を受賞。2011年春に初めての個展を開催予定。

にたはら・ゆう

1990年福岡県生まれ。2009年東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業。2009年第6回安川加壽子記念コンクール第1位ならびに安川加壽子音楽賞、特別賞。2010年7月、王子ホール(東京)にて初のソロリサイタル。これまで野沢優子、多美智子の各氏に師事。



「第6回安川加壽子記念コンクール」本選演奏風景。
2009年7月31日、保谷こもれびホール (写真提供: 日本ピアノ教育連盟)



第6回安川加壽子記念コンクール第1位

安川加壽子音楽賞・特別賞(全日本社会貢献団体機構賞)受賞

仁田原 祐

◆音楽学部器楽科(ピアノ)2年

僕は福岡県大川市の出身で、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校(以下、藝高)入学のため上京しました。偶然にも、大川市は『のだめカンタービレ』の主人公の出身地だったので、僕がちょうど藝高在学中に大ブームになり、とても驚きました。

祖父の家にピアノがあったので、小さい頃からそれを触って遊ぶのが好きでした。そして6歳からピアノを習い始め、その後、福岡市まで通ってピアノを学ぶようになり、東京の藝高に進んで音楽を続けていくことに両親も背中を押してくれました。

藝高時代は、高い目標を持った友人たちに多くの刺激を受け、伴奏や室内楽などいろいろなことが経験できました。ま

た東京は地方よりも演奏会などが充実しているのでとても勉強になります。

高校2年生から3年生にあがる春休みに、パリに約10日間の音楽研修に行く機会がありました。フランス音楽を勉強しはじめた時期だったので、より深く学びたいと考える機会にもなりました。また美術館を観覧するスケジュールも組まれていて、ルーブルやオルセー、オランジュリーを訪ねて印象派の絵画をみるのができたのもすばらしい体験でした。

僕が第1位をいただいた「安川加壽子記念コンクール」は3年に一度開催されるもので、藝大の教授を務められた安川加壽子先生の偉業を伝えていくという目的もあります。安川先生もパリで学ばれ、フランス音楽を得意とされていたので、

コンクールの本選ではフランスの作曲家の曲を演奏することになっていました。

フランス印象派のピアノ音楽の魅力は、曲に描かれた風景が聴き手に思い浮かぶことで、客観的に眼に見える「絵」が重要だと思います。

コンクールでも、先日のソロリサイタルでも弾いたラヴェルの《鏡》は、自分にとってとても大事な曲で、弾くたびに新たな発見があります。ラヴェル自身がピアノを得意としたので、弾けるようになるにつれ、自然と手が音にはまっていくな感覚があり、またラヴェルがつけた強弱に従って弾いていくと、ほんとうに色が出てくる。僕の音楽を聴いてくれる人に、色や光を感じてもらえる演奏を目指していきたいと思っています。

第20回ザグレブ国際アニメーションフェスティバル
学生部門「Special mention」受賞

田中美妃

◆大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻修了

私は、大学院映像研究科アニメーション専攻の第一期生として入学し、今年の3月に修了しました。藝大美術学部デザイン科4年生のとき、卒業を目前に控えて、ちょうどタイミングよくアニメーション専攻の募集が始まったので応募したんです。学部2年生のとき、選択の授業でアニメーションを初めて制作し、絵を1コマ1コマ動かすというところが、自分の性分と合っているように実感しました。そして何よりも楽しかったのです。それで、もう少し詳しく勉強してみようと思っていました。

大学院に進んでみると、1年生のときからみっちり授業が組まれていて、とても充実していました。そして2年になると、修了制作の作品にじっくりと取り組むことができ、今回、賞をいただいた『つままれるコマ』という作品は、修了制作でつくったものです。

「ザグレブ国際アニメーションフェスティバル」は、クロアチアの首都ザグレ

ブで開催されるもので、アヌシー（フランス）、オタワ（カナダ）、広島（日本）と並んで、「世界4大アニメーションフェスティバル」と呼ばれるほど権威のある映画祭なんです。

今回は、東京藝術大学が「最優秀学校賞」に選ばれたということもあり、また同じ専攻の友人の作品もノミネートされているということもあったので、ヨーロッパ圏に行くのは初めてだったのですが、私も思い切って出掛けてみることにしました。

1週間のフェスティバルのあいだに、世界のアニメーションの最先端から回顧上映にいたるまで、さまざまな上映会が行われ、受賞作品が決まりますが、楽しみながら学ぶことができるものでした。私が受賞した「Special mention」という賞は、学生の作品を対象とした「特別審査員賞」と解釈して頂ければいいものだと思いますが、賞が決まったときは本当に驚きました。

フェスティバルは若いボランティアスタッフも多く関わっていて、みんなで運営しているといった手作り感を感じました。また、ふつうの市民の方も大勢上映会を見にきており、日本よりもアニメーションの敷居が低いことが実感されるものでした。

また、フェスティバルの期間中に、フィンランド、ドイツ、イギリスの学生との公開座談会に参加し、お話しをする機会がありましたが、ヨーロッパの学生は、効率的だという理由から、コンピュータ・グラフィックスを利用した作品づくりが多いことなど、さまざまな考えの作家さんが世界中にいることを改めて感じました。

私の作品には明確なストーリーはなく、台詞もなく、音楽と手書きの絵だけで構成されています。もともと手書きの持つ質感が好きですし、それが醸し出す動きのおもしろさにこだわって作品をつくり続けていきたいと思います。



田中美妃監督『つままれるコマ』

たなか・みき

1982年東京都生まれ 2008年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。2010年同大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻修了。2010年6月、「ザグレブ国際アニメーションフェスティバル」で監督作品『つままれるコマ』が学生部門「Special mention」を受賞。受賞作品はDVD「東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻第一期生修了作品集2010」（東京藝術大学出版会）で観ることができる。



TOPICS OF
MUSIC

2010.02-07

音旬

1

山田耕柞の直筆原稿

平成二十一年十二月、山田耕柞の『自伝 若き日の狂詩曲』（大日本雄辯會講談社、昭和二十六年）の原稿と初版本（自筆サイン入り）が、当時の編集担当者・窪田稲雄氏より本学へ寄贈された。

四百字詰め「耕柞用箋」（山田耕柞特注の原稿用紙）に書かれた原稿は、序・本文・跋（^{はく}）をあわせて五〇七枚で、著者の思いの強い部分や登場人物にデリケートな配慮を要する箇所などで特に入念に推敲し加除した痕が見られる。時代の節目をいくつも越えて保存されてきた原稿の出現は、山田の実像にさらに近づくことを可能にする目の覚めるような出来事であった。

2

台北芸術大学伝統音楽演奏会

会場：音楽学部第六ホール

七月九日、音楽学部第六ホールにて、台北芸術大学伝統音楽演奏会が開催された。

この演奏会は、日本の伝統音楽を学ぶために来日した国立台北芸術大学音楽学院伝統音楽学科の学生によるもので、研修に参加した学生らが、琵琶や古琴（七絃琴）、南管樂、北管樂といった伝統樂器を演奏し、多岐のジャンルにわたって台湾伝統音楽の名曲の数々を披露した。

3



台北芸術大学伝統音楽演奏会

台湾伝統音楽の名曲を披露

2



アジア音楽祭2010 in 東京

2010年のテーマは
「日本の〜(和)の音と心〜」

4



ショパンの胸像寄贈

ショパン生誕200年を記念してポーランドより寄贈

3

ショパンの胸像寄贈

会場：音楽学部校内、奏楽堂

本学音楽学部校内にはベートーヴェンをはじめ著名な音楽家の胸像が設置されているが、新たにショパンの胸像が設置された。この胸像は、ショパン生誕二百年を記念してポーランド共和国が世界各地へ設置しているもので、日本では本学に寄贈された。

五月二十二日には音楽学部校内において、宮田亮平学長、ミロスラヴ・ザサダ駐日ポーランド大使館代理臨時大使ほか、多くの関係者が参列するなか除幕式が執り行われた。

除幕式終了後に奏楽堂で開催されたショパン胸像除幕式記念ピアノリサイタルでは、ショパンの作品を中心に、若手ピアニスト、ダニエル・ヴヌコフスキ氏が演奏した。

4

アジア音楽祭2010 in 東京

会場：東京藝術大学上野キャンパス、文京シビックホール・北とびあ(さくらホール)、旧東京音楽学校奏楽堂、東京芸術劇場(大ホール)

十月一日から六日まで、本学奏楽堂を始め東京芸術劇場ほか都内の音楽ホールを会場に『アジア音楽祭2010 in 東京』が開催される。

この音楽祭は、アジアの現代と伝統の音楽に焦点をあて、アジアの人々との文化的交流を目的として東京都などが主催し、本学や日本作曲家協議会などと共催して開催するもの。

二〇一〇年は、「日本の〜(和)の音と心〜」をテーマとしており、多彩なプログラムを通じて、世界における日本の果たす文化的役割を考察する。

映旬

1

Media Kitchen

◎メディア映像専攻

会場：横浜キャンパス 新港校舎

五月八日から九日にかけて、メディア映像専攻第五期生による特別演習での成果を発表する演習としての展示「Media Kitchen」が横浜キャンパスで開催された。

学生らが三週間にわたる特別演習(担当：藤幡教授)で、制作を通して映像メディアをさまざまな角度から捉え直すとともに、どう扱うかという問題と向き合った本展では、映像の起源であるカメラ・オブスクーラを制作するところから始まり、音と映像、言葉とイメージ、空間と投影、見る人と作品の関係など、さまざまな視点から制作された成果が展示された。

2

フェミス(仏国立映画学校)

ー東京藝術大学 合同ワークショップ

◎映画専攻

会場：横浜キャンパス 馬車道校舎

五月二十九日から六月十三日まで、映画製作者を志す日仏映画学校の学生による合同ワークショップが横浜キャンパスで開催された。

この試みは在日フランス大使館の働きかけにより実現したもので、映画学校の先達である仏国立映画学校フェミスと本学映画専攻の学生らの交流を目的としたもの。ワークショップでは、映画産業に携わる講師を数多く招き、学生が幅広い観点から知見を得られるようにするとともに、第一線で活躍中の映画人との繋がりを作れるよう配慮がなされた。

3

「コンテンツポラリアーアニメーション入門」第四回講座

シオン入門」第四回講座

◎アニメーション専攻

場所：横浜キャンパス 馬車道校舎

同時代のアニメーションの見取り図を描くことを目標に平成二十一年度より開講している公開講座「コンテンツポラリアーアニメーション入門」。その第四回講座が七月三十一日、エストニアをそして世界を代表する監督プリート・バルン氏とオルガ・バルン氏をお迎えし、特別講座として開講した。

本講座では、日本を代表するアニメーション作家であり本学アニメーション専攻の山村浩二教授が司会進行を務め、両氏の最新作二本を上映するとともに二人の創作の秘密に迫った。

4

GEIDAI-CINEMA #4 &

GEIDAI ANIMATION 01+

◎映画専攻・アニメーション専攻

会期1：四月十七日(土)、十八日(日)

会場：上野キャンパス 美術学部中央棟第一講義室

会期2：六月十九日(土)～七月二日(金)

会場：ユーロスぺース(渋谷)

本学上野キャンパス及びユーロスぺース(渋谷)にて、映画専攻第四期生とアニメーション専攻第一期生の合同上映会「GEIDAI-CINEMA #4 GEIDAI-ANIMATION 01+」が開催された。

この上映会は修了作品展として行われたもので、映画専攻の修了作品五作品とアニメーション専攻の修了作品十一作品を上映。ユーロスぺースでは、ゲストを招いてのトークショーも開催され、連日盛況な上映会となった。



Media Kitchen

メディア映像専攻

1



「コンテンポラリーアニメーション入門」

第4回講座

アニメーション専攻

3



フェミス (仏国立映画学校) - 東京藝術大学合同ワークショップ

映画専攻

2



GEIDAI-CINEMA #4 & GEIDAI ANIMATION 01+

映画専攻・アニメーション専攻

4

GTS GEIDAI TAITO SUMIDA Sightseeing Art Project 2010

藝大・台東・墨田観光アートプロジェクト



主催：GTS（藝大・台東・墨田）観光アートプロジェクト実行委員会

TOPICS OF
FINE ARTS

2010.02-07

美旬

GTS（藝大・台東・墨田）観光アートプロジェクト 2010

東京藝術大学と台東区、墨田区の共催による地域連携事業

1

1

GTS（藝大・台東・墨田）観光アートプロジェクト 2010

本学と台東区、墨田区の共催による地域連携事業「GTS観光アートプロジェクト」が実施される。

このプロジェクトは、平成二十二年度から二十四年度までの三年間、東京スカイツリーから浅草を結ぶ地域を芸術によってミュージアム化し、地域に貢献する芸術環境拠点の形成と新しい芸術の発信地となる地域創成を目指すもの。平成二十二年度は、東京スカイツリーのビューポイントに環境アート作品やアートベンチなどの設置を行う「アート環境プロジェクト」と国際現代芸術展、音楽コンサート、映像作品展などの会場と地域の名所を観光できるツアーとして楽しめる「国際アートプロジェクト」が実施される。

2



こだま色いろ図鑑

美術学部デザイン科3年生(当時)の有志6人によるワークショップ

2



天野太郎の建築展 あるべきようは

天野名誉教授の没後20年記念展

3

こだま色いろ図鑑

会場：東京大学医学部附属病院内こだま分教室

昨年十一月、美術学部デザイン科三年生(当時)の有志六人が、東京大学医学部附属病院内のこだま分教室において、「発信」をテーマにワークショップを開催した。

これは学生らが、長期入院中の子供たちに90分の授業を行い、そこで制作したものを、後日子供たちがだれかに伝えたいくなるような／伝えられるような形にして返すことで完結する試み。子供たちが描いた「色」についての絵は、学生の編集とデザインで「こだま色いろ図鑑」という形になり、参加した全員に手渡された。この自発的な試みは今後もさまざまなテーマで続いていく。

3

天野太郎の建築展 あるべきようは

会場：大学美術館 陳列館2階

五月十一日から二十三日まで本学陳列館にて「天野太郎の建築展 あるべきようは」が開催された。本展は、天野名誉教授の没後二十年を記念し、主要作品の設計原図、模型、図面、写真、資料などを一堂に集め、天野の目指した空間をたどる企画。

戦後早く、フランク・ロイド・ライトに直に学んだ「有機的建築」の思想やアルヴァ・アアルトの影響をもとに、「あるべきようは」と自問し、自身の建築を追い求めた天野の理想とする空間は、時代を経た現在の我々にとっても依然魅力をもち続け、これからの建築のありようを示唆している。



保存修復彫刻研究室「研究報告発表展」
シンワアートミュージアム（銀座）内の展示風景

4



公開講座「SPECULA: 21世紀芸術論」
先端芸術表現科と大学院映像研究科による公開講座

5

4

保存修復彫刻研究室 「研究報告発表展」

会場：シンワアートミュージアム

四月二十五日から五日間、銀座のシンワアートミュージアムにて、文化財保存学保存修復彫刻研究室「研究報告発表展」が開催された。

今回初めて学外で行われることとなった発表展に展示されたのは、鎌倉時代初期の仏師、快慶の作かと話題になった善光寺の阿弥陀如来立像をはじめとする六件の修復研究報告のほか計十三点。他の研究室の協力のもと、模刻や模写、模造といった修復以外の物件も紹介するなど多彩な研究成果の披露が行われた。

5

公開講座

「SPECULA: 21世紀芸術論」

会場：美術学部中央棟第一講義室

六月二十六日、上野キャンパスの美術学部中央棟第一講義室で先端芸術表現科と大学院映像研究科による公開講座「SPECULA: 21世紀芸術論」の第一回が行われた。

本講座は全八回の予定で、シリーズを通して気鋭の若手論客、千葉雅也氏と池田剛介氏がホストを担当する。初回はゲストに批評家の浅田彰氏とアーティストの岡崎乾二郎氏を招き、「芸術とハ現在V」をテーマに、重層的なハ現在Vの可能性から出発し、さまざまな分野にわたる議論が交わされた。

同講座では、今後もそれぞれの分野で刺激的な探究を進めている方々をゲストに迎え、これ



特別講義「中国絵画と日本画の融合」―墨からの出発―

日本画専攻の学生を対象とした中国中央美術学院中国画学院副院長の胡偉先生による特別講義

6

からの芸術論の外郭を示すような議論を展開していく。

★詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.geidai.ac.jp/labs/specula2010/>

6

特別講義

「中国絵画と日本画の融合」

―墨からの出発―

会場：台東区立下谷小学校

シンポジウム「アジア・芸術の創造―芸術大学の役割―」が五月十九日に開催され、出席された各国教員による特別講義が各科で開かれた。五月二十日には、下谷小学校で日本画専攻の学生を対象に、中国中央美術学院中国画学院副院長の胡偉先生による特別講義「中国絵画と日本画の融合」が行われた。

中国画のもつ墨の奥深さと日本画のきらびやかな材料を融合させ、新しい中国画の基盤を築く先駆者である胡偉先生は、日本で学んだ経験や自身のこれまでの制作について話すとともに、日本画教員との座談会では、作家を取り巻く環境や中国絵画の現状、さらには中国での日本画の認知度などを解説した。最後は公開制作が行われ盛況裏に終了した。

Exhibition & Concert

Information

展覧会 & 演奏会

情報

TOPIC 1

明治の彫塑 ラグーザと荻原礫山

第一部：ラグーザとその弟子たち

第二部：没後100年 荻原礫山

10月23日から12月5日まで、本学大学美術館において、「明治の彫塑 ラグーザと荻原礫山」展を開催いたします。

本展は、日本近代彫刻史において重要な役割を果たした2人の作家に焦点を当て、とくに明治期の彫塑技法に関するさまざまな問題を浮き彫りにしようという試みです。

イタリア人彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザ（1841-1927）は、明治9年に開校した工部美術学校に招かれ、日本に初めて西洋彫刻を伝え、近代日本彫刻の基礎をつくりました。本展では、ラグーザ芸術だけでなく工部美術学校での美術教育のあり方にも注目していきます。

一方、荻原礫山^{おぎわらくざん}（1879-1910）は、ラグーザの来日から30年を隔てた明治後期、パリでロダンの《考える人》をみて彫刻家を志しました。明治40年から没する明治43年までのわずかな活動



右：ラグーザ《日本婦人》1880(明治13)年 東京藝術大学所蔵
左：荻原礫山《文覚》1908(明治41)年 東京国立近代美術館所蔵

期間でしたが、日本の近代彫刻に新しい風をもたらしました。2010年は礫山の没後100年にあたる記念の年となります。本展では礫山の絶作《女》に焦点を当て、石膏原型と複数のブロンズ像との比較などを紹介いたします。

展覧会スケジュール（2010年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。）

大学美術館本館

7月3日(土)～10月11日(月・祝)	ボンビドー・センター所蔵作品展 シャガールーロシア・アヴァンギャルドとの出会い ～交錯する夢と前衛～	入場料：一般1500円、高・大学生1000円(中学生以下は無料)
① 10月23日(土)～12月5日(日)	明治の彫塑 ラグーザと荻原礫山 第一部：ラグーザとその弟子たち 第二部：没後100年 荻原礫山	入場料：一般600円、高・大学生400円(中学生以下は無料)
10月23日(土)～12月5日(日)	黙示録：デューラー／ルドン	入場料：一般400円、高・大学生250円(中学生以下は無料)
12月12日(日)～12月24日(金)	東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展	入場無料
1月29日(土)～2月3日(木)	第59回東京藝術大学卒業・修了作品展	入場無料

陳列館

10月6日(水)～10月11日(月・祝)	GTS市民参加ワークショップ展 スカイツリーを描く絵画展	入場無料
10月19日(火)～11月7日(日)	Textile Connection (テキスタイル コネクション)	入場無料
11月15日(月)～11月29日(月)	東京藝術大学日本画第二研究室 素描展	入場無料
12月9日(木)～12月23日(木・祝)	田中一幸教授退任展	入場無料

正木記念館

10月26日(火)～11月7日(日)	彫刻展示室(田中記念室) 開室	入場無料
--------------------	-----------------	------

※ 開館時間は、10:00～17:00（入館時間は16:30まで）。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間及び休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先

● ハローダイヤル TEL: 03-5777-8600
● 大学美術館 TEL: 050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

TOPIC 2

モーニングコンサート

木曜日の午前11時から奏楽堂にて約1時間にわたりモーニングコンサートが開催されています。

年間13回開催されるこのコンサートは、約40年前から継続して行われており、各科から選抜された優秀な学生が、プロフェッショナルオーケストラである藝大フィルハーモニアと共演、ソリストを務め、また、作曲した管弦楽作品を初演するという学生が主役のコンサートとなっています。

現在の奏楽堂で行われるようになった1999年度以降、年を追うごとに多くの来場者に足を運んでいただくようになり、近年は満席となる回が増えています。



演奏会スケジュール (2010年7月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

奏楽堂

10月 1日(金)	アジア音楽祭2010 in 東京 オープニングセレモニー&オーケストラ・コンサート1	18:00開演	2000円	自由席
10月 2日(土)	アジア音楽祭2010 in 東京 藝大21 藝大とあそぼう2010 「アジアの子どもサミット」邦楽器による子どものためのコンサート	15:00開演	1000円(高校生以上) 500円(小中学生)	自由席
10月 9日(土)	藝大オペラ定期 第56回「イル・カンビエッロ(小広場)」 第1日	14:00開演	3000円	指定席
10月10日(日)	藝大オペラ定期 第56回「イル・カンビエッロ(小広場)」 第2日	14:00開演	3000円	指定席
10月16日(土)	東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 第22回定期	14:30開演	無料(事前申込制)	自由席
10月22日(金)	藝大プロジェクト2010 藝大フィルハーモニア定期(藝大定期第341回)	19:00開演	2000円	自由席
10月29日(金)	学生オーケストラ ブロムナード・コンサート2	11:00開演	無料	自由席
11月 6日(土)	ハイドン・シリーズ 室内オーケストラ演奏会	16:00開演	2000円	自由席
11月 7日(日)	藝大プロジェクト2010 うたシリーズX-2	15:00開演	2000円	自由席
11月 9日(火)	藝大プロジェクト2010 ピアノシリーズ第1回「凜」 一天才たちの青春 (ショパン・シューマン・リスト)	19:00開演	2000円	自由席
11月12日(金)	藝大学生オーケストラ定期 第43回(藝大定期第342回)	19:00開演	1500円	自由席
11月14日(日)	ハイドン・シリーズ 室内楽演奏会	15:00開演	2000円	自由席
11月19日(金)	藝大プロジェクト2010 藝大フィルハーモニア・合唱定期(藝大定期第343回)	19:00開演	2000円	自由席
11月20日(土)	学長と語るⅧ ゲスト：片岡鶴太郎(俳優・画家)	15:00開演	無料(事前申込制)	指定席
11月23日(火・祝)	藝大定期 吹奏楽 第76回	14:00開演	1500円	自由席
11月27日(土)	藝大プロジェクト2010 ピアノシリーズ第2回「技」 一ヴィルトゥオジティとフォルムの邂逅 (ショパン・シューマン・リスト)	15:00開演	2000円	自由席
11月28日(日)	弦楽シリーズ 音楽に息づく詩	15:00開演	2000円	自由席
12月 1日(水)	邦楽定期演奏会 第77回	17:30開演	2000円	自由席
12月18日(土)	藝大プロジェクト2010 ピアノシリーズ第3回「舞」 一躍動するピアノリズム (ショパン・シューマン・リスト)	15:00開演	2000円	自由席
12月25日(土)	藝大プロジェクト2010 ピアノシリーズ第4回「空」 一永遠なる高みへ (ショパン・シューマン・リスト)	15:00開演	2000円	自由席
1月10日(月・祝)	藝大プロジェクト2010 ピアノシリーズ第5回「響」 ピアノとオーケストラのための作品 (ショパン・シューマン・リスト)	15:00開演	2000円	自由席
2月 5日(土)	藝大定期 室内楽 第37回 第1日	15:00開演	1500円	自由席
2月 6日(日)	藝大定期 室内楽 第37回 第2日	15:00開演	1500円	自由席
2月13日(日)	東京藝大チェンバーオーケストラ 第16回定期	15:00開演	1500円	自由席
2月19日(土)	管打楽器シリーズⅡ	15:00開演	2000円	自由席
3月19日(土)	藝大21 第6回奏楽堂企画学内公募演奏会	15:00開演	無料	自由席
2 11月11日、25日、2011年2月10日、17日(いずれも木曜日)	モーニングコンサート	11:00開演	無料(要整理券)	自由席

※ 詳細につきましては、9月末発行予定の「平成22年度コンサート・スケジュール(後期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。
<http://www.geidai.ac.jp/>

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケットの取り扱い

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650

※ 「学内演奏会」の日程については、次の番号へお問い合わせください。

- 音楽学部教務係 TEL: 050-5525-2309

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300
- 音楽学部附属音楽高等学校 TEL: 050-5525-2406

上野の 寄り道 散歩道

第2回

「味の老舗」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒正しい社寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。

1 上野精養軒

うえのせいようけん

創業…一八七二年

住所…台東区上野公園四一五八

TEL…〇三―三八二―二二八―

「カフェランランドーレ」で食べ

ることができる写真のハヤシライ

スは、一三六〇円。

屋上ビアガーデンは二〇一〇年は

九月十二日まで営業。





2 伊豆栄梅川亭

いずえいうめかわてい
創業…享保年間（一七一六〜一七三五）

梅川亭は一九八九年開業。

住所…台東区上野公園四一三四

Tel. 〇三―五六八五―二〇一―

うな重に刺身、とろろ、きも吸、

香の物が付いた写真の「うなと

る重」は二八三五円。「うな重」

（きも吸、香の物付）は「梅」が

二八三五円。

3 韻松亭

いんしょうてい

創業…一八七五年

住所…台東区上野公園四一五九

Tel. 〇三―三八二一―八二二六

豆腐料理を中心とした写真の「花

籠本膳」は三五〇〇円（昼食メ

ニュー）。夜会席は六三〇〇円

から。甘味処の「あんみつ」は

六五〇円。



明治から大正、昭和の初期にかけて、上野から谷中のあたりは、多くの文人墨客が集いその居を構えた。上野公園の敷地内や周辺の料亭やレストランは、芸術家たちの美食の欲求に応えるように、自慢の味を競ったのである。

そのひとつが、不忍池を見下ろす高台に建つ「上野精養軒」である。もともと築地で開業していた「精養軒ホテル」の支店として、明治九（一八七六）年に開業。大正十二（一九二三）年の関東大震災で築地本店が焼失したため、上野が本店となった。精養軒が力を入れたのは、なんとと言っても、日本ならではの「洋食」であった。ヨーロッパへの遊学経験を持つ東京美術学校、東京音楽学校の教官たちも満足させたことであろう。本格的なフランス料理を提供する「グリルフクシマ」、ハヤシライスが自慢の「カフェランランドール」や、屋上テラスで夏のあいだビアガーデンも営業している。

不忍池の周囲に三つの店舗を構える「伊豆栄」は、備長炭で焼いたふくらとした鰻で広く知られている。江戸時代に創業され、錦絵や浮世絵にも描かれた由緒ある老舗だが、明治時代に入ると、今度は小説や随筆などに書かれるようになった。緑濃い上野公園内にたたずむ梅川亭は、池之端の本店、不忍亭とはまた違った趣で、落ち着いた雰囲気なのが、「うなとろ重」をはじめとする名物料理を味わうことができる。

二つの店のほど近くある「韻松亭」も、創業明治八（一八七五）年の歴史を誇る。寛永寺の鐘楼「時の鐘」に隣接し、韻松亭の屋号は東京国立博物館の初代館長である町田久成が名づけ親だという。一時は日本画家・横山大観がオーナーを務めたこともあるという和風建築は、改装の手が加わっているものの、歴史と風情を感じさせてくれる。甘味処もあり、ふらりと立ち寄ることができる雰囲気だ。

上野の杜の 波瀾 万丈

第十回

東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 前篇 橋本久美子

太平洋戦争の最中、東京音楽学校の生徒が陸軍戸山学校軍楽隊に入隊する。戦後の音楽界を背負っていくことになる学徒たちの知られざる青春。

それは
一枚の張り紙から始まった

昭和十九年十月一日、東京音楽学校(以下、音校)生十四名が陸軍戸山学校(以下、戸山学校)軍楽隊に入隊した。敬称略、五十音順に、芥川也寸志(大正十四〜平成一、本科作曲部)、石津憲一(大正十三〜、本科声乐部)、伊藤榮一(大正十四〜、甲種師範科)、内田富美彌(大正十三〜昭和五十一、本科器楽部トランペット)、奥村一(大正十四〜平成三、本科作曲部)、北爪規世(大正十三〜、本科器楽部ヴィオラ)、梶原完(大正十三〜平成一、本科器楽部ピアノ)、齋藤高順(大正十三〜平成十六、本科作曲部)、鈴木良一(大正十四〜平成九、本科器楽部ピアノ)、團伊玖磨(大正十三〜平成十三、本科作曲部)、沼田元一(大正十三〜、甲種師範科)、早川博二(大正十四〜平成十六、本科器楽部トランペット)、萩原哲昌(大正十四〜昭和五十九、本科器楽部クラリネット)、藤島義勝(大正十四

昭和五十八、本科器楽部オーボエ)である。

彼らの証言によれば、それは十八年十月の明治神宮外苑競技場における出陣学徒壮行会から半年経った十九年の四月頃、校内に出された一枚の張り紙から始まった(團は校長から呼ばれたと記す)。校長名で、徴兵検査を受ける生徒に対して、戸山学校軍楽隊への入隊希望者を募る内容であったという。

東京音楽学校と 陸軍戸山学校の交流

学内文書が確認されないため、本稿は『東京芸術大学百年史』既載の芥川、齋藤、團の文章、ご健在の四名(石津、伊藤、北爪、沼田、軍楽隊で音校生の二年先輩の内務班長・高澤智昌(大正十一〜)、澤野立次郎(本学同声会理事(昭和七〜)の談に負うところが大きい。

この背景には音校と戸山学校との交流がある。そもそも音校は明治四十一年以来、海軍省から軍楽練習生を受け入れて教授する一方、音校の

演奏会では海軍軍楽隊が管楽器パートに加わった。また戸山学校へは大正十五年以来、音校から杉山長谷夫(ヴァイオリン)、平井保三(チェロ)、高折宮次(ピアノ)を派遣した。そのレベルは戦後、軍楽隊からチェロの二名がNHK交響楽団に入団したことからも想像される。加えて、乗杉嘉壽校長(明治十一〜昭和二十二)が昭和六年に欧州視察した際、ドイツでは後の陸軍軍楽隊長・山口常光(明治二十七〜昭和五十二)と一緒に劇場見学をした。両者の十年以上にわたる交友が、音校生の集団入隊を可能にしたのである。山口は十九年三月から二十一年二月まで音校の「教職」の教務嘱託であった。

山口は最後の軍楽生徒について著書『陸軍軍楽隊史』にこう記す。杉山、平井両氏より、遠からず学徒動員で召集される音校生たちをいたずらに戦地に赴かせるのではなく、音楽技術を生かして戦争に協力できないものかとの申し入れがあった。それを受け入れた判断は間違っていないかった。

戸山学校は明治六年、士官・下士官の教官養成を目的に新宿区戸山、尾張徳川侯の広大な下

屋敷に創立。現在は都立戸山公園となり、「箱根山・陸軍戸山学校址」の碑がある。箱根山の麓にある六角形の石造りの野外演奏場跡が当時の名残を留めている。入校年の三月末現在で満十六歳以上二十歳未満若干名募集、入試科目は国語、作文、算術、地理、歴史、唱歌であった。

入試は「身体検査が主体で、試験官がピアノの鍵盤を叩いて、受験生が同じ高さの音を出す程度の試験があった」と高澤と齋藤は語るが、音校生のほとんどは入試の記憶が希薄である。

軍楽生徒の修業期間はもとより二年であったが、十七年度は一年間、十九年度は八ヶ月に短縮され、卒業後は軍楽上等兵となった。「若干名」とあるが、明治二年の薩摩藩士三十名以来の氏名を記した『陸軍軍楽隊員名簿』によれば、十六年〃十九名、十七年〃五十二(入学時五十五、志願者数二千五百)名、十八年〃百名、十九年〃百十九(入学時百二十)名であった。

入隊の日、十四名は揃って新大久保駅で電車を降り、改札口を出る。待っていた女生徒たちの《海ゆかば》にしばし聴き入り、見送られて門をくぐった。



1. 出陣学徒壮行会 昭和18年10月21日 東京音楽学校の全校生徒が吹奏と合唱で参加。武蔵野音楽学校（現武蔵野音大）、東京高等音楽学院（現国立音大）の管楽器生も加わっていた（高澤談）。



2



3



4



5

2. 終戦当時の陸軍戸山学校（山口常光編『目で見える吹奏楽百年史』昭和46年）
地面の穴は焼夷弾の痕（高澤談）。同校は体育・武道・射撃・音楽の教育を行った。
3. 「箱根山・陸軍戸山学校址」の碑と高澤智昌氏 平成22年7月18日撮影

4. 野外演奏場跡 平地部分に譜面台を立てて演奏し、周囲の傾斜地が観客席となった。
昭和18年初め頃には反響板も作られた（高澤談） 平成22年7月18日撮影
5. 山口隊長率いる陸軍記念日の行進（出典は写真2に同じ） 昭和20年3月10日

担当楽器が決まる

入隊後、担当楽器が決まる。音校で管楽器専攻の内田、萩原、早川、藤島はそのまま。伊藤は青山学院中学部の音楽部で吹いていたトロンボーン、沼田は本人の希望でテナーサクソスとなる。管打楽器の経験がない場合は、芥川「私のように両方とも駄目な者は、背丈、面構えなどをジロツとにらんで、どんなきめていきます。その早いこと早いこと」。團「厳格な身体検査の後、上半身裸で一列に並ばせられた前を、前歯を見せろ、と言いながらベテランの上官が数人で歩いて過ぎながら楽器を決めて行く」。

その結果、奥村（齋藤筆、沼田談）と梶原（高澤談）はオーボエ、鈴木（伊藤談）はクラリネット、齋藤はアルトサクソス、芥川はテナーサクソス、北爪と團は小太鼓と決まった。石津のようにトロンボーンを申し出て始めたが、「喉は大丈夫か？ 小さなチューバの管が楽だぞ」と言われ変更になったケースもある。入隊時より歌の要員と考えられていたのであらう。

（はしもと・くみこ／音楽学部講師）
（次号につづく）

次号予告

東京音楽学校生の陸軍音楽隊入隊 後篇

軍楽隊に入隊した十四名はどのような生活を送ったのだろう。また学徒出陣以降の東京音楽学校はどうであったか。さらには生徒たちの戦後をたどる。

出版会活動

◆『形成的表現から平和へ―美術教育私論―』を二月二十六日より発売

日本の美術教育理論の構築をめざす本書は、イメージをもとにした造形表現という独自性をもった教科の特徴と、表現による人間形成という形成的表現の構造、そして平和をめざす美術教育への道筋を明らかにしている。



◆『藤田嗣治の絵画技法に迫る…修復現場からの報告』を二月二十六日より発売

一九二〇年代のバリ画壇で寵児となった藤田嗣治が創出した独特な「乳白色」。自らの代名詞ともいえるこの色彩技法を秘密に

したまま、藤田はこの世を去った。本書は、これまで謎であった藤田の絵画技法の解明をめざす、世界でも例のない試みである。



◆『サラウンド入門』を三月九日より発売

本書は、映画、DVD、デジタル放送などにおける新しい音響フォーマットとして採用されている「サラウンド制作」について書かれた実践的な解説書。基礎的な理論から実際の制作現場で役に立つ実践的な例まで、幅広い内容を三人の著者がわかりやすく解説している。



◆CD『東京藝大チエンバーオーケストラ』を三月九日より発売

二〇〇九年二月に千住カズミが指揮したヨハン・セバスティアン・バッハの「マサチューセッツ交響曲」を収録したCD。

ヴァイオリニストでウィーン音楽大学の教授でもあるマイスル氏と、藝大の若いヴィルトワールたちによる熱演が楽しめる。「収録曲」ハイドン…交響曲第四十四番「短調（悲しみ）」シェーンベルク…室内交響曲第一番「メンドルスゾーン」…交響曲第一番「短調」



◆『いま天心を語る』を三月十二日より発売

天心がいまに残した多くの遺産に、平山郁夫、高階秀爾ら各界の論者が多角的・多

元的に切りこんだ渾身の書。多くの新たな知見が示された刺激的な討論が全収録されている。未来への布石となるべき注目の書。



◆『伝統のイタリア語発音』を三月十二日より発売

本書は、オペラ・歌曲を歌うためのイタリア語発音を身につけるために作成されたCD二枚付のテキストとなっている。イタリア語の韻文の伝統に則った発音を、母音、子音のそれぞれの音からオペラの詩句まで、CDに従えば、イタリア語の知識の有無に拘らず、また独学であっても修得できるように考えられている。



◆楽譜『オペラ・デ・イ・オ・ニ・ユ・ス』を三月十八日より発売

台本は中嶋敬彦、作曲は佐藤眞の手になるこの版は、創作シンポジウム「台本と、その作曲部分の楽譜を合冊としたもの」。

この台本の意図を汲み取り、佐藤眞が現代作曲技法の限りを尽くして曲作りをしたこの新しい試みは、音楽の専門家だけでなく、広く音楽の愛好家に対して、音楽創造と音楽表現・享受の場で多くの示唆を与えることだろう。



◆DVD『邦楽で綴る「平家の物語」(後編)』を三月十五日より発売

邦楽の古典に多大な影響を与えた「平家物語」をテーマに、音楽学部邦楽科と美術学部が協力して作り上げる「和楽の美」公演。

本DVDは、「平家物語」を題材とした数々の邦楽古典曲と「平家物語」にちなんで創作した曲を物語順に構成し、各曲間を語りで分かりやすく結んだ「邦楽で綴る『平家の物語』」完結編。



◆DVD『アニメーション専攻第一期生修了作品集2010』を三月十九日より発売

二〇〇八年春、横浜に誕生したアニメーション専攻。二年を経て初めての修了制作十一作品を収録したDVDが完成した。若く未完成ながらも独創性に富んだ十一の視点で、学生たちが二年間を費やして探求した「アニメーション表現との対話」。その成果として生まれた短編作品群は、耳慣れた「アニメーション」のイメージから私たちを軽々と解放して、より自由で広大な「ANIMATION」表現のステージを予感させる。



◆『応挙・呉春・蘆雪 円山・四糸派の画家たち』を六月十八日より発売

本書は、本学名誉教授、故山川武の研究著作から中心的な研究テーマであった円山四糸派に関する論考、とくに円山応挙、呉春、長沢蘆雪の三人の画家についての論考を再編集したもの。

江戸絵画の研究者はもちろん、これから研究をはじめようとしている学生にとって必読の書といえる。



東京藝術大学出版会の出版物等は、本学アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇―五五二五―二二〇二）まで

交流

◆大学間国際交流協定締結

四月一日、ロイヤルアカデミー・スクールズ（イギリス）と本学大学院美術研究科は、美術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

六月十七日、ナント芸術大学（フランス）と本学大学院美術研究科は、美術に関する交流を深めるとともに、教育及び研究に関する協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

これらの調印により、本学における交流協定締結校は、十六か国（地域）、四十六大学等となった。

◆シンポジウム「アジア・芸術の創造―芸術大学の役割―」を開催

五月十九日、音楽学部第六ホールにてシンポジウム「アジア・芸術の創造―芸術大学の役割―」が開催された。

シンポジウムでは、中国・台湾・韓国で芸術教育に携わっている計十一大学十三名の元留学生を招聘し、国内外の芸術系大学との国際連携事業や元留学生とのネットワーク強化事業を紹介するとともに、アジアにおける芸術の創造を進めていくために必要な芸術大学の役割について討論が行われた。

受章・受賞

◆北川原温教授が「日本芸術院賞」を受賞
三月十八日、「中村キース・ヘリング美術館」を建築した業績が認められ、美術学部建築科の北川原温教授が、日本芸術院賞を受賞した。なお、授賞式は五月三十一日に行われた。

◆北野武特別教授がフランス芸術文化勲章「コマンドール章」を受章
三月九日、「映画監督としてだけではなく、さまざまなジャンルにおいて自由さを持つてものつくりを進める直感的な才能を持っている」と評され、大学院映像研究科映画専攻の北野武特別教授が、フランス芸術文化勲章の最高章である「コマンドール章」を受章した。

◆藤幡正樹教授(大学院映像研究科長)が「第六十回芸術選奨文部科学大臣賞」を受賞
作品「Simultaneous Echoes2009. a field-work in London」や教育分野での取り組み、執筆活動等が認められ、三月十九日、大学院映像研究科メディア映像専攻の藤幡正樹教授が、第六十回芸術選奨のメディア芸術部門において文部科学大臣賞を受賞した。

◆植田一穂准教授がMOA美術館賞を受賞
六月十二日、美術学部絵画科日本画の植田一穂准教授の作品「夏の花」が、MOA岡田茂吉賞の絵画部門においてMOA美術館賞を受賞した。

◆東京藝術大学が「最優秀学校賞」を受賞
クロアチアで開催された第二十回ザグレブ国際アニメーションフェスティバルにおいて六月六日、学生部門に学生三名の作品が公式出品されるなど、本学大学院映像研究科における人材養成が高く評価され、東京藝術大学に最優秀学校賞(Best Animation School)が贈られた。

運営

◆平成二十一年度卒業式

三月二十五日、奏楽堂にて平成二十一年度卒業式が挙行された。式は杉本峯夫教授と器楽科学生による「ファンファーレ」の華々しく荘厳な響きで幕を開け、続いて宮田学長から卒業生、修了生の総代に学位記が授与された。その後壇上では、邦楽科の教員・学生による慶祝に満ちた演奏が奏でられるなか、作務衣に着替えた宮田学長が改めて登壇し、縦横約

二メートルの特製パネルに「忠」の文字を揮毫した。

学長は「忠」を「自分のまごころや他人を思いやる心など、人間関係に一番必要で不可欠なものを表す字」と説明するとともに、愛の心、人との出会いの心を備えた豊かな生き方のできる人になってくれることを望んでいると述べ、大学を巣立つ若者たちを激励した。

◆平成二十二年入学式

四月五日、奏楽堂にて平成二十二年入学式が挙行された。

邦楽科教員が奏でる「春の海」の典雅な箏と尺八の調べで清々しく幕を開け、学長式辞では、宮田学長が、式辞の最中に壇上で「誓」という文字を揮毫し、「確たる志をもって集い、互いに向かい合い、励ましあい、さらには互いに尊敬しあつて、日々を心豊かに送ってもらいたい」と述べ、大学生生活のスタートを切る学生たちを激励した。

◆学長と語ろうⅦ

奏楽堂トーク&コンサート

六月十九日、第七回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」が、ゲストに女優の鶴田真由さんを招いて開催された。



第一部

は「映像から伝えられるもの」をテーマに、世界各地を訪れた鶴田さんの貴重な体験が映像とともに紹介された。対

談で鶴田さんと宮田学長は、絵や歌やものづくりが人間の本質的なもので、同時に心を癒すものであると語り、心と直結している芸術の力を確かめ合うとともに、人の心を育む芸術教育の大切さを訴えた。

休憩を挟んだ第二部コンサートでは、湯浅卓雄准教授の指揮による藝大学生オーケストラが、鶴田さんからリクエストをいただいたブラームスの交響曲第三番を演奏し、熱心に練習を重ねてきた美しい音色が奏楽堂に響き渡った。

次回、第八回「学長と語ろう 奏楽堂トーク&コンサート」は、俳優・画家の片岡鶴太郎氏を迎えて、十一月二十日(土)に開催される。

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数(平成二十二年七月三十一日現在)
賛助フレンズ個人二三名 法人四団体
特別賛助フレンズ個人一六名

◆今年度上半期に開催された主な展覧会、演奏会記録

《大学美術館》
コレクション展
朝倉文夫 朝倉彫塑館所蔵
2020 芸大コレクション 動物を中心に
会期 四月六日〜六月六日
入場者数 一万五二五三名

《奏楽堂》
藝大フィルハーモニア定期
新卒業生紹介演奏会
開催日 四月十五日
入場者数 七四〇名

藝大21 創造の杜
ヤニス・クセナキス―音の建築家―
開催日 四月二十二日
入場者数 六八〇名

第四十二回藝大生オーケストラ
定期演奏会
開催日 五月二十八日
入場者数 六四四名

第21号刊行にあたって

藝大通信も21号を迎えさらなる内容の充実をはかるため、今号においてもリニューアルを実施しました。

より藝大らしくビジュアルを全面に押し出した「geidai gallery」というページを新たに設け、初回はデザイン科の中島千波教授にご登場願ひ、雑誌の冒頭を華やかに彩っていただきました。

本誌は「謎の多い大学」と見なされがちな東京藝術大学の「人」にまず着目し個性的な教員や学生を紹介していきます。次号からはさらに「場」や「営み」に焦点を当て、藝大がどのような大学なのかをできるだけ多くの方々に理解して頂けるよう「紙」ならではの情報をいかに提供していきたいと思っております。今後も企画を検討していきますので新しい藝大通信の展開にご期待頂きたいと思います。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、
東京藝術大学公式 Web サイト
(<http://www.geidai.ac.jp/>) を
ご覧ください。

●展覧会についてのお問い合わせ

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 050-5777-8600

●演奏会についてのお問い合わせ

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

●演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel.050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel.03-5355-1280
チケットびあ
Tel. 0570-02-9999
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650

●藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102
Fax 03-5685-7823

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No.21 SEPTEMBER 2010

編集発行

東京藝術大学 藝大通信編集部